TBS落語研究会　２０２１年８月２５日（水）（第６３８回）
新・落語掌事典

データ名：新落語掌事典202108

田中優子

●西行（鼓ヶ滝）

西行は一一一八年から九〇年まで生きた実在の人物で、出家前の名前を佐藤義清（のりきよ）と言い、鳥羽院の北面の武士だった。ところが二十二歳の若さで突然、出家してしまう。理由は不明だ。陸奥、出羽に旅に出てその後は高野山や吉野山に隠遁したが、そのあいだに和歌を詠み続け、『詞花和歌集』にも採られた。やがて嵯峨に住んで『千載和歌集』に一八首が選ばれ、歌人として知られるようになった。『新古今和歌集』には九十四首も入っている。和歌を王朝風から精神的、哲学的な境地に高めた人で、謡曲や芭蕉俳諧に大きな影響を与えた。旅する歌人として謡曲では伝説化し、多くの曲に登場している。ところが謡曲『鼓滝』には登場していない。この咄は、たくさんある西行伝説に、謡曲と組み合わせて作った新たな西行伝説、というところだろう。伝説を生み続ける人物なのだ。

●題名（夏泥）

この噺は安永七年（一七七八）に出版された笑話本『気の薬』に収められている「貧乏者」が原話である。貧乏夫婦が登場人物だ。上方では「打飼盗人」という題名で演じられていた。東京では大正末期に「夏泥」または「置泥」という題名で演じられた。上方と東京では、登場人物や泥棒が起き忘れる品物の違いはあるが、内容はほとんど同じである。「名は体を表す」と言われる。題名も聴き手に演目への期待や連想を促すきっかけとなる。落語は上方と東京が競うように切磋琢磨をしてきた。同じ噺なのに題名が異なるのは、両地の生活習慣の現れなのだろう。打飼は筒状の布の空いた両端を、紐で結んだ簡単な入れ物（打飼袋）の一種だ。馴染みの少ない言葉だが、この噺の内容にはぴったりの題名である。打飼にはこの袋を指す名詞の他に「えさ」「餌食」という意があるからだ。

●大桟橋と竹屋の渡し（船徳）

この噺は元々『お初徳兵衛浮名の桟橋』という長編の人情噺である。お初徳兵衛と言えば、近松門左衛門の浄瑠璃『曾根崎心中』を思い浮かべるが、内容はまったく違う。題名である浮名の桟橋は、おそらく大桟橋を指したものだろう。大桟橋の場所は候補が二つある。その場所のひとつが、山谷堀を入ってすぐの今戸橋の手前だ。ここは待乳山聖天がある山谷堀の入り口と向島三囲神社を結ぶ、竹屋の渡しのルートでもあった。噺の中で「徳さん一人かい。大丈夫かい」と返事をするおじさんが登場する。竹屋の渡しの船頭だ。しかし柳橋から浅草の四万六千日へ向かうルートとしては、少し遠回りだ。もうひとつは現在の駒形橋付近だ。浅草側の川岸に駒形堂があり、ここに大川に突き出すように桟橋があった。ここには、架橋される前は駒形渡しがあった。

●腐敗（ちりとてちん）

古来より発酵食品は世界中で作られてきた。豆腐にも沖縄料理に豆腐餻（よう）がある。中国にも同類の豆腐乳がある。しかし発酵と腐敗とは異なる。腐敗では微生物の作用で有機物（生物の死骸、分泌物、排出物）が分解され、変質し悪臭を出す。有機物への酸素の供給がなくなることが、微生物の代謝を促す結果となる。微生物は突然どこからともなく現れるのではなく、いつでも空気中や土中や生物の表面や体内に存在している。微生物を完全滅菌（加熱）し、密栓により新たな微生物の侵入を防ぐと腐敗は防ぐことができる。この方法は缶詰や瓶詰を生み出した。微生物が増殖不能な条件をつくり、たとえ侵入しても腐敗を防げる方法もある。これは塩漬けや砂糖漬けを生み出した。発酵は腐敗と酷似しているが、決定的な違いは酵母や乳酸菌（共に微生物）等の存在である。

●カランコロン（お札はがし）

圓朝作の『怪談牡丹灯籠』（明治一七年、速記本）の原話は、幕末末期の浅井了意による怪奇物語集『御伽婢子』だ。更に『御伽婢子』の原話を辿ると、中国唐代の『剪灯新話』（柳宗元）に収録されている『牡丹燈記』である。圓朝の噺も含めて全てが長編だ。圓朝全集を読み直すと、まず駒下駄の音がカロンコロンと聞こえて来る。次に灯籠をもった三十歳ばかりのお米の姿が見え、その後ろから十七、八のお露が歩いて来る。お露は武家の娘である。駒下駄はむしろ遊女の履物として知られていた。灯籠と駒下駄で遊女の道中をイメージさせたか。しかも日本の幽霊には足がないはずだが、これは中国由来の話だからか。日本の怪談物は亡霊となって加害者に取り憑く仇討ち的な内容が多い。亡霊となっても人間との恋愛を貫く物語は、新しい世界だったろう。

田中優子（法政大学名誉教授、江戸東京研究センター特任教授）
法政大学社会学部教授、学部長、法政大学総長を経て現職。
専門は江戸時代の文学、美術、生活文化、アジア比較文化。
現代社会についての連載エッセイなどもある。
『江戸の想像力』で芸術選奨文部大臣新人賞
『江戸百夢』で芸術選奨文部科学大臣賞、サントリー学芸賞
その他著書多数。2005年紫綬褒章。